
気付けばゲームの世界

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気付けばゲームの世界

【Nコード】

N6163Z

【作者名】

山田

【あらすじ】

気付けばゲームの世界にいた私と仲間の人たち。

何故この世界に來たのだろうと、混乱しながらも進もうとするお話。

1話

いつものようにネットゲームをプレイして、いつものように寝るはずだった。

それがなぜ、私は非現実世界（ゲームの世界）にいるのでしょうか！！！？

始まりはゲームのサイトトップに掲載されたイベント告知。
タイトルは確か”腕に自信のあるチームのみ参加せよ！”だったはず。

チームの構成は6人でLVは最高値の者のみ受付とのことだったので高レベルのダンジョンに向かう際には大抵一緒にいた人達と組んでそのイベントに参加申し込みしたところ
なぜかゲームの世界にも入ってしまったという
意味がわからない状態になっている。

私の格好は頭がすっぽり隠れる厳つい兜に、上着は皮で出来た動きやすい服、下はズボンに膝まである皮で出来たブーツを履いている。グローブもはめているため肌が出ている部分はどこにもないし、体の線が出ない服を着ているから外見からは分からないけど
黒髪黒目の平凡な顔立ちの女のキャラだ。

このキャラクターを作ったときのコンセプトは”厳ついものを着ているが実は女！”だ。

声は女の声なので実はも何もなくバレてしまうのだが、時たま、声は女で体は男というネタキャラをつくっている人もいるので、完璧にばれているわけではないと思いたい。

まあ女性が厳ついものを着ているのいいよね！って軽いのりで作っただけなので女であるということを隠したかったわけじゃないから別にいいんですけどね。

因みにこのキャラクターの職業は弓使い。

上から下まで鎧を着たかった私としては剣士や重剣士になればよかったのだけど

ギルドにも入らずクエストも基本一人で終わらせるスタイルが出来るようにと考えていたので、職業が限られてくる。

剣士や重剣士では探索スキルやそれに変わるスキルがなく一人で行動するには操作するもの自身のスキルが高くないと難しい。

限られた中で一番厳つい格好が出来るものとなったら弓使いだったのだ。

それでも高レベルになると一人の力では進めない難しいダンジョンがあり

その時は一緒に連れて行ってもらっパーティーが今回事件？に巻き込まれた仲間だったりする。

突然の異世界トリップに私たち6人はパニックに陥っていたのだけど空が夕焼け色に変わり、お腹がすいた頃には表面上では落ち着きを取り戻していた。

「・・・ここで野宿は不味いから、いったん町へ行かないか？」

このパーティーを組んだとき何時もリーダーの役目を担う剣士が提

案する。

この剣士の人は基本ソロプレイの私としては珍しく、よく話していた人でゲーム中では一番仲が良い。

まだ呆けた状態が続いているので、知り合いで、なおかつ誘導してくれる人がいることはとても有難かった。

「よっしゃ。じゃあサッサといくべ？でも、この荷物どうするよ。」
それに軽く答えたのは暗殺士の人。

この人は他のみんなと違い、この世界に来たことを素直に喜んだただ一人の人だ。

因みに剣士の人と暗殺士の人は同じギルドで、2人はかなり仲が良く、以前聞いた話ではリアルでの友達らしい。

先ほども仲良く2人だけで話し合いをしていた。

いや、話し合いというか、暗殺士の人が興奮して騒ぎ立てるのに剣士の人が突っ込みを入れたり怒ったりしていただけたが。

「えーと、金は絶対に持つていくとして、クエスト用のアイテムとかは置いていこう。」

手に持ちきれないけど、絶対に持つて行きたいものがある人は言うてくれ。」

ゲームの中では30種類の荷物をかばんに入れて持ち運ぶことができたけど

現実ではそうもいかならしく、辺りにはゲームのキャラクターに持たせていた荷物が散らばっている。

ここから町に行くとなると、多少はモンスターに出会うことになる。そうになると、弓使いである私は両手が開いていて身軽でないと戦えない。

つまり、お金と飲み物・食べ物・武器以外は置いていかないといけないのだ。

私はゆっくり立ち上がると、目の前に落ちていた弓と弓矢を一番に背負った。

弓を手に持った瞬間、不思議な感覚が広がる。

続けて右側に落ちていた1本の短剣を腰に挿し、人差し指ほどの針を30本拾って右のポケットに入れる。

お金を左のポケットに入れて、HP回復用の飲み物2本と食べ物2つを腰に下げた袋に入れた。

さて、私は準備万端だ。

剣士と暗殺士の方は持つていく物の重要度でもめているようだ。

この2人のほかに、重剣士（男）と魔法使い（女）、僧侶（女）がいて

重剣士の方はすでに荷物をまとめたらしく、大きな袋を横に置き、太い剣と重そうな盾を木に立てかけ、その前に座り込んでいる。

魔法使いの方はぶつぶつ独り言を言いながら、未だ何を持つていくかで迷っているらしい。

僧侶の方は・・・なぜだか私の目の前にいる。

「何でしょうか。」

「服をくれ！」

えーと。僧侶の人の服装は豊かな胸と細い綺麗な足を際どい所まで

外に出していて布の面積が小さく寒そうだ。

まあ、寒さ以上に恥ずかしいだろうけど。
でも。

「可愛い服装なら、サラディアさんに譲ってもらったほうがいいんじゃないですか？それともサラディアさん、手持ちでは持っていなかったとか？」

「そうじゃなくて……！おれは……こんな……なりたかったんじゃないくて……うあー！！！」

僧侶の人が手を顔に当て、膝をつく。

なんだなんだ。

心配してくれたのか、好奇心なのか、剣士・暗殺士・魔法使いの3人が揃ってこっちに来てくれた。

「あ、サラディアさん。キラキラマジックさんが服が欲しいとのことなので、譲ってあげてくれませんか？」

キラキラマジックさんとは僧侶の人のことで、彼女は人一倍おしゃれにうるさい。

ゲームのアップデートで新衣装が出るとチェックをして気に入ったものがあれば速攻手に入れているほどで

そんな彼女が満足するような可愛い衣装を私は持ち合わせていない。

その言葉と、この状況にサラディアさんと剣士の人と暗殺士の方は納得したようだ。

「ディディアちゃん。こいつ男だから、よければディディアちゃんのやつ、ズボンとか体が隠れるやつだから貸したげて？」

暗殺士の人が笑いをこらえながら言う。

因みにディディアとは私のこのキャラクターでの名前だ。

「俺とこいつの装備じゃあ合わないだろうし、サラディアの女っぽい服も着たくないんじゃないの？」

暗殺士の人の言葉にキラキラさんは悔しそうにうなずく。

基本的に私は手荷物の中に余分な服は入れていない。

何時も入れている人はお洒落用の服を持っている人だろう。

でも、こっちの世界に来る前に反復クエストをしてモンスターを狩りまくっていたので

品物のレベルは低いけど売ってお金にしようと思っていたから、何点か装備品を拾って持っていた。

「それでは、えーと。これなんかどうでしょうか。」

周りをきよるきよる見渡して、お目当てのものを拾い上げる。

私が今来ているものより少し生地が薄く、装飾品も少なく地味な上下の装備品。

「ありがとうございます。」

そう言ったキラキラさんは今来ている服の上に私の渡した服を急いで着た。

まあ、下着みたいな衣装だったからね。

しかし、異世界に來ただけでもどうしようって感じなのに、さらに性別まで変わるって・・・。

顔を青くして下を向いている巨乳金髪碧眼の美人の中身が実は男とか・・・。

「キラキラさん。ファイトです。」

「キラキラって言うな。」

同情して勇気付けたところ、睨みつきで返されました。

「では、なんと呼べば？」

「・・・タケシ・・・いや、キラで・・・。」

うん。タケシが本名なんだろうけど、その姿では無理があるからね。

「で。皆準備はできたか？」

剣士の人が中央に立ちみんなを集める。

「なあ。まじでこれ持って行こうぜ。絶対金になるから！俺めっちゃがんばって集めたんだぜこれ！」

暗殺士の人がピョンピョン跳ねながらこちらにアピールしてくる。
足元には拳大の宝石がキラキラ輝いていた。

「30個あるから、一人5個ノルマでどうよ。」

暗殺士の人言葉に魔法使いのサラディアさんが反論する。

「無理。これ以上持てないから。」

サラディアさんの右手には自身の身長ほどの杖、左手には短剣。腰にはMP回復用の薬がずらりと並んでいた。

「短剣を腰に挿して宝石を袋に入れて左手に持ったらいけるんじゃない？」

サラディアさんは首を振る。

「無理。これ以上持ったら私途中で座り込むよ。」

暗殺士の人とサラディアさんがにらみ合っていると、今まで黙っていた重剣士の人が声をかけてきた。

「じゃあ、俺が持つ。」

左手に重そうな盾を持って、後ろに剣を付け、その上に大きな荷物をかけている状態でさらに持とうというのだろうか。

「この体だとまだまだ持てる。」

なんと。もしかして、ゲームのステータスがすべてこの身に反映さ

れているのだろうか。

暗殺士の人が調子に乗って、30個すべての宝石を袋につめ重剣士の人に渡すと

苦もなく、ひょいっと肩に担いだ。

暗殺士の人でさえ引きずっていたというのに、恐るべし重剣士！

いや、そもそも暗殺士もそこまで体力なかったか。

とにかく、移動の準備ができた私たちは町のほうへ足を進める。ゲームの世界の地図と同じであるようお願いながら。

2話

1時間ほどゲームの記憶を頼りに歩いていると、大きな川と石で作られた橋が見えた。

その橋が見えたとなん皆の顔が笑顔になる。

端の向こうに町が小さく見えたからだ。

暗殺士の人々が橋に向かって駆け出そうとした瞬間

水の中から鰐のようなモンスターが這い上がってきた。

すかさず私は弓を構える。

その瞬間、なぜか今までゲームの中で習得したスキルがどうすれば使えるのか理解できていた。

弓を拾った時から薄々、私はこの弓を使いこなせるとどこかで感じたのだけど、構えたことでそれは確信に変わる。

鰐のようなモンスターはゲームの中にも存在していたので、攻撃パターンは知っている。

意外に移動速度が早いモンスターなので、呪文を唱え弓矢に鈍足スキルを入れて鰐の足元に打ち込む。

すると、狙い通りに鰐のモンスターは足を痙攣させ移動速度をかなり落とした。

戦闘体制に入っただのは私だけではなかったようで、暗殺士の人がいっつの間にか鰐の後ろに回りこんでいて

両手に持った中剣で踊るように切りつけていた。

モンスターは暗殺士の人に狙いを定めたようで、後ろを振り向くとガバリと大きな口をあける。

そこに剣士の人が両手に持った大剣を上から下に振りぬき鱈のモンスターを真つ二つにした。

私たちの勝利である。

少し震える手を見て、モンスターの前でハイタッチを交わす暗殺士の人と剣士の人を見る。

私、弓使いでよかった・・・。

モンスターから金貨が出るわけでも消えるわけでもなく、ただそこに死体としてあり続けるのを見て
魔法使いのサラディアさんが嘔吐していた。

その後はモンスターに会うこともなく無事に城までたどり着き、宿をとるときにあたりは真つ黒になっていた。

今後のことを考えて1部屋で済ませようと思っていたのだけど、宿屋の女将さんに1泊の料金を聞いたところ
ゲーム内の価格と変わらず安く、レベル最高値まで勧めた私たちに
とっては取るに足らない値段だったので
各自1部屋ずつ宿をとることにした。

一人になって色々考えたいから丁度よかったかも。

宿の内装はベット1つに丸い小さな机一つのみ。

もといた世界のベットより硬く、寝心地は悪そうだったけど。精神的にも体力的にも疲れていた私は装備をすべて取り
ベットにダイブして1分もしないうちに眠りに落ちた。

次の朝、誰に起こされるでもなくムクリと上半身を起こす。

私は目覚まし時計より早く起きるタイプで、大体7時ごろにおきるようになっている。

判を押したような生活を送ってきた成果だろう。

両手を上にあげ、うーん。と体を伸ばす。

しばらくボーっとした後、丸い机の上に容器に入った水があったので、それを使用して顔を洗った。

ベットに腰掛けてまたボーっとしてみる。

昨日は一人になって色々考えたいと思っていたけど、朝起きてぼつんと知らない世界に一人でいると、とたんに誰か知ってる人の傍にいたくなってしまった。

そう思うと本当に寂しくなって、すぐに兜をかぶり、装備を身につけ宿の一回にある食堂に向かう。

さっぱりした性格だと思ってたけど、私って結構甘えたりだったのかもしれない。

食堂に下りたとき、壁際の四角い4人がけの席に剣士と暗殺士の人が見界に入ってほっとする。

小走りで2人の元に向かうと、途中で気づいた剣士の人が手を振ってこっちに来いと合図をしてくれた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おっはよー。」

私の挨拶に、2人とも挨拶を返してくれる。

「座って。今ちようど、今後の話に移ったところなんだ。」
剣士の人が隣の椅子を引いてくれたので、そこに座る。

「思うに、現状で動けるのはこの3人だと思うんだけど。間違いないかな。」

剣士の人が真剣な顔で私に聞いてきた。
きつと戦闘になったときの事とその後の態度で判断したんだろう。

戦闘になったとき、私たち3人は瞬時に動けたけど後の3人は固まったように動かなかった。

魔法使いのサラディアさんは座り込み嘔吐までしていたから、そうとう精神的に参っているだろう。

僧侶のキラさんは青ざめて、宿に着くまで剣士の人の腕を離さなかったし。

重剣士の人は終始無言だった。

3人の事を考えると確かに私は動けると思う。
剣士の人を見て、縦に首を振る。

ほっとしたのか、剣士の人は肩の力を抜いて笑顔でこちらを見て、よかった。と呟いた。

剣士の人の格好は昨日見た鎧姿ではなく、綿でできた普通の衣服を着ていた。

赤い短髪に金色の目、両耳には攻撃力UPになるピアスが合計5個ついていて、長身でガタイが良い。

改めてみると、お洒落で格好良い人だ。

「イケメンですね。」

その笑顔を見て私はポツリとつい思っていた事をそのまま言葉に出してしまった。

キャラクターを作る初期設定（元から用意されていた顔のつくり）は綺麗な顔のものだから、ゲーム中のプレイヤーはほぼ美男美女であつた。

だからゲームをしてるときは顔について特に思わなかったけど、いざ目の前で生身で動かれるとかつこよさが際立つというかなんと言うか。

わざと平凡に作り変えた私としてはちよつと後悔したりして。

不細工というわけではなくて、特徴のない顔といえいいのか、平均顔といえいいのか。素朴といえいいのか。

悶々していると、斜め前から視線を感じた。

視線の主は暗殺士の人で、自分を指差し興味心身に聞いてきた。

「俺は？俺もかつこよくね！？」

暗殺士の人も昨日見た装備ではなく、こちらで綿で出来た衣服を着ていた。

少し肩にかかるほどの銀髪で瞳の色は青色。剣士の人ほど長身じゃないけど、私よりも少し高い。

体の太さも私より少し大きいかなと思う細さだけど、着崩した服から少し除く筋肉を見ると

結構がつしりしているようだ。

カッコ良いというより、色気がある系？ホスト系？

まあ、見た目はこちらも良く、綺麗な顔をしていらつしやる。

私がかつこいい。というと。

だろ。と鼻歌まで歌いだす。

この世界を満喫しまくってますね……。うらやましい。

私のため息をつく、ふと思い出したように暗殺士の人はこちらを向く。

「ディディアちゃんの顔が見たい。」

おいおい。勘弁してくださいよ。

「別に見せるのは嫌じゃないんですけど。この流れで兜を取るの嫌です。」

落ちにされるのが目に見えているので遠慮します。

え。と言いながら暗殺士の人が席を立ったので、ビクリと反応してしまう。

まさか、強硬手段で兜をとるのか！？そこまでする必要がありますか！！？

ひやりとしたその時。

「サイ、止める。」

剣士の人が、暗殺士の人を怒ってくれた。

暗殺士、サイはそんな剣士の人をニヤリと見た後、はいはい。と軽く返事を返し、席に座りなおしてくれた。

「すみません。私がアリさんを格好良いと言ったから脱線してしまいましたね。話を元にもどしましょう。」

剣士の人はアリという名前だ。2人ともつと長い（暗殺士の方は変な）名前だったけど略して呼んでいる。

「そうそう、話を元にもどすけど。ディディア、本当に動けると考えて大丈夫か？」

本当かどうかはわからないけど、一応動ける戦力としてみてもらって大丈夫だろう。

私はもう一度首を縦に振る。

「よし。じゃあ、俺たち3人で今日は行動しよう。」

あとの3人はどうするのだろうか。まあ、昨日の様子からすぐに動ける状態ではないのはわかっていているけど。

「他の3人は・・おそらく、今日一日はこの宿から出たくないだろうな。」

彼ら3人の気持ちもわからなくはない。特に性転換してしまったキラさんの気持ちを考えると・・。

「で、考えたんだけど。今日は一度、ギルドをまとめる本部に顔を出してみないか？」

自分たちが所属するギルドがどうなったのか見てみたい気持ちはわかるけど、私ギルドに入っていないんですが・・。

とは言えず、首を縦に振る。ギルドに入っていないけど、一応他の人がどうなったか確かに気になるしね。

朝食を食べた後、席を立ち宿屋の扉を開けたところで暗殺士のサイが突然意見を変えた。

「やっぱさ、手分けして周りの状況探らねえ？」

「3人とも別々にか？」

「いや、俺だけ別。俺さ、ちょっと街に言って獣人の女の子・・じゃなくて聞き込みに言ってくるわ。」

なるほど、獣人の女の子を探しにいくんですね。

ゲーム内では獣人の種族もいて、猫耳に猫尻尾とかウサギ耳の女の美人さんとかいたからね。

生身で見れるのなら、私も一度は見てみたいけどさ・・。

「で？何を聞き込むんだよ。」

剣士の人はひつくい声でサイを睨み付ける。

「えーと。ほら、あれ。町の状況とか？物の価格とか？とにかく色々だよ！色々。」

いいだろー。とサイはすでに別行動する気満々だ。

剣士のアリは大きくため息をつく。

「わかった。ただ、手ぶらで帰ってきてみる、マジで殺すぞ。」

その言葉に、はいはいと手を振ってスキップでサイは街中へ消えていった。

「なんだろ。あいつが凄くうらやましく思える。」

「大丈夫。私もです。」

お互い顔を見合わせて少し笑う。

でも、サイさんのような存在がいてくれて精神的には助かっているかもしれない。

「じゃあ、行こうか。」

その言葉に私は首を縦に振る。

もちろん、アリさんの存在も大きく助かっていますよ。

3話

ギルドを束ねる本部は町の中心にある噴水の近くにあり、神殿のよ
うな建物なので迷うことなく私たちはたどり着けた。

ギルド本部は騎士団の駐屯所でもあるらしく、受付は騎士の格好を
した人が一人いた。

私たちがドアを開け中に入ると、その騎士はにこりと微笑んでくれ
た。

「いらつしゃい。御用は何でしょうか。」

アリさんはその受付の人の前まで行くとグルリと本部内を見渡す。

「えっと。ギルド名が書かれている一覧みたいなのはありますか。」
その質問に騎士の人は困ったように笑う。

「ありますけど。一般の人にお見せする事は出来ませんよ。」

「けちななあ。名簿ぐらい見たって何もないだろうと思っけど口には
出しません。」

「なら、”月見草”ってギルドがあるかどうか教えてもらっ事は？」
「それでしたら。」

アリさんが尋ねたギルドが存在するかどうか調べるために騎士の
人は手元の鉄板に手をかざし、何か呪文を唱えていた。

「残念ながら”月見草”というギルドは現在、存在してないですね。」

ため息をついたアリさんは、では、とその後と10〜20のギルド名を尋ねていたけど

一つも同じ名前のものは存在していなかった。

ふと、言葉に引つ掛かりを覚えた私は横から口を挟んで、騎士の人に質問をする。

「では、昔はどうですか？過去そういったギルドは存在してませんか。」

騎士の人は驚いた顔でこちらを見る。

「お、女の方でしたか。」

ああ、そうだった。私、兜をかぶってきちんと装備してる格好でした。弓も背負ってるし。

どうやら、このキャラクターを作ったときに考えていた事、”厳ついものを着ているが実は女！”が成功したようだ。ちよつと嬉しい。

じつとこちらを凝視している騎士の人にアリさんは咳払いをして、サッサと調べてくれと催促した。

「あー、申し訳ありませんが。昨日の午前中に大きな雷が情報をまとめている施設に落ちてしまいました。」

数年前まで更新がなかった情報はすべて飛んでしまったんですよ。残念ですが。」

私とアリさんは顔を見合わせる。

昨日の午前中といえば、私たちがこの世界にやってきた時と同じだ。何かの偶然だろうか、いやきつと関係している事だろう。

アリさんは腕を組んで少し考えた後、騎士の人に一つ質問をする。

「ここらで大きなギルドと言えばどこですか？出来れば依頼を多く

受けている有名な所、信頼できるギルドがあれば教えてください。」
大きなギルドなら色々な人がいて、今回私たちがここにくる事になった原因について少しでも何かを知っている人がいるかもしれない。

騎士の人はその言葉にすぐ反応してくれた。

「ここから一つ東の通りにガザニアというギルドがあるんだけど、そこがお勧めですね。」

「ガザニア。一つ東の通りですか。」

「はい。そこは我々騎士団と直結しておりまして、騎士団の仕事、国の仕事も手伝ってもらうほど信頼の出来る大きなギルドでお勧めですよ。」

なるほど。確かに信用度No.1だ。

「ここは首都から離れた町だからギルドの建物も小さくて首を傾げるかもしれないけど、首都に行くとかかなり大きな建物でビックリするから。」

それに、この町にはそのギルドしかないからね。」

私たちは騎士の人にお礼を言って、教えてもらったギルドに向かう。

「ディディアは喋らないほうがいいよ。俺が交渉役になるからさ。」
あれ、私じゃないこと言いましたかね。
ちょっと反省。

「いや、違う。その、女の子だってバレると嫌な事とか余計なことありそうだしさ。」

しゅんとなった私を見て慌ててアリさんはフォローに回る。

そこまで心配されなくても、ムチムチのお姉さんとか美人の女の人

とか普通に街中歩いてたから
こんな見た目、男か女かわからないようなのを相手にする人はいないだろう。

「アリさん、実は心配性ですね。」

「うーん。そうかな。」

手を顎において首をかしげるイケメン。

頼りになってイケメンで強いとか。萌えです。

じっと見つめていた視線に気づいたアリさんは顔を赤くして慌てます。

「あー、とにかく！ディディアはしゃべらない事！俺が何とかするから。」

「でも、それじゃあ私ついてきた意味なくないですか。」

アリさんは首を横に振る。

「ある。大いにある。意見も聞きたいし。」

へらりと笑うと。

「一人じゃ不安だし。」

この可愛い生物は何だ！

「アリさん。抱きしめてもいいですか。」

思った事がつい口に出てしまった。

目を大きく見開いたアリさんは次の瞬間、ゆでだこになり
申し訳なく思った私は素直に謝って、アリさんが動き出すまで黙って空を見続ける事になりました。
アリさんは意外とウブ。

その後、私たちはガザニアで登録を済まして、ギルド員カードが出来るまで昼食をとることにして

一旦、宿屋に戻ってきた。

「よう。丁度良いタイミングだな。」

宿屋に入り一回にある食堂を覗くと暗殺士のサイと重剣士と僧侶のキラさんの3人が昼食をとっていた。

「2人とも落ち着いたか？大丈夫か？」

アリさんがそう尋ねると、2人はやや青い顔で頷く。

重剣士の人は綿の衣服を着ていて身軽な服装をしている。

想像に違わず、ムキムキマッチョな人で、緑の髪と目をしていた。もちろん顔はほりが深くてかつこいい。

僧侶の巨乳金髪碧眼美人で中身男なキラさんは昨日私が上げた服をまだ着ていた。

あまり似合っていないし、胸がきつそうだが、現にボタン結構はずしてゐるから胸見えてるし。

「で、ギルドの方はどうだった？」

私たちは首を振る。

「変わりにガザニアというギルドにさつき登録を済ませてきたところだ。カードを後でとりに行かなきゃいけない。」

暗殺士のサイは頷く。

「俺は個人倉庫を調べてきたんだけどさ。」

ゲーム内で荷物は倉庫のあるところならどこでも出し入れ自由だっただろ？

でも、その場所自体がなかった。都市に行けば大きな倉庫があるって話だったけど

俺らの倉庫があるかどうかも怪しいし、あつたとしても俺たちはどうやってその倉庫が自分の物だって証明すりゃいいんだ？」

「証明するのは厳しいだろうな。」

「だろ？だから無いものとして行動しないとなあ。」

個人倉庫に置いていたお金と宝石や回復薬など色々をあてにしていた分だけシヨックだ。

お金がすぐに尽きるわけじゃないけど、今後のことを思うとギルドの依頼とか頑張ってこなしたほうがいいだろう。

「サイもこの後ガザニアで登録するか？」

アリさんの問いにサイさんはうーんと考えて首を横に振る。

「俺はもうちょっと、聞き込みしとくわ。」

なるほど、午前中では獣人が見つからなかったんですね。

昼食が届いたので兜の締め付けを緩めて下からサンドイッチを入れてもそもそ食べていると

どこからか視線を感じたのでそちらをしてみる。

視線を感じる先には重剣士の人がいて眼が合った。

なんだろう、目をそらされては合わされて、こちらがよそを向くはずと見られている感じがする。

この人も私の素顔が見たいのだろうか。

とった時のがっかり感が分かるので無視しておこう、そうしよう。

ギルドに登録しに行くかと重剣士の人と僧侶の人にも一応声をかけ

てみたけど、やっぱり首を横に振られました。

4話

昼食も終わって、アリスさんと2人でギルド・ガザニアに行くと受付のお姉さんが手を振って呼んでくれた。

「これ、ギルドカードね。無くしたら再発行しなきゃいけないて手数料とか貰う事になるから気をつけてね。」

「ありがとうございます。」

アリスさんがお礼を言って私の分までカードを受け取ってくれた。

2人揃って依頼が貼り付けているところに足を向けようとしたところ、受付のお姉さんに呼び止められる。

「あ、ちよつと待って！」

私たちは振り向きお姉さんのほうを見ると、お姉さんは別の方向に向かって誰かを呼んでいた。

「ギーリイーさんー！例の2人組み来たのでお願いしますー！」

例の2人組みとは私とアリスのことだろうか。いやきっとそうだろう。

奥のほうからアリスさんと同じような身長で同じようにがっしりした体系の人が奥からゆっくりと出てきた。

寝ていたのだろうか、頭が寝癖だらけでせっかくの綺麗な金髪がぐちゃぐちゃだ。

金髪に碧眼、たれ目の色男！うちのパーティーにも金髪碧眼美人の色っぱいお姉ちゃんがいるから

2人せつとにして並べてみたい！

中身両方男になるけどね！

色々と脳内妄想していると、受付のお姉さんが金髪碧眼・色っぽいお兄さんに私たちを紹介していた。

「この2人がさっき言ってた人たち。

都市に向かって行きたいらしくてね。それなら、モンスター討伐の依頼受けてもらって

倒しながら進んで完了報告と牙や角などの引渡しは本部で行ってもらいたいなーと思うんだけど。

その依頼を受ける事が出来るランクにね。彼ら到達してないの。」

受付のお姉さんは新人をこき使う気マンマンのようです。

色っぽいお兄さんは方眉を上げる。

「じゃ、駄目だね。」

お姉さんは、まあまあ、とお兄さんを引き止める。

「だから、ランクUPの試験をギーリーさんが手伝ってくれませんか？」

「どのランクに挑戦するの？都市部までのモンスター討伐依頼はランクEからだっけ。今のランクいくつ？」

眠そうなのに結構協力的だなあと見ていると、お姉さんが疑問に答えてくれる話をする。

「彼らのランクはJランクよ。さっき入ったばかりなの。でもね、その川にすむモンスターを倒せたって言ってるし結構良い線行くと思うのよ。」

それに、今人手が足らなくてギーリーさんSランクの人たち色ん

な所に飛んでいって大変でしょ？
新人育てないと！」

結構良い線と言った受付のお姉さんの視線の先はアリさんの体を見ながら行っていた。

うん。いい体してるもんね！

私たちをじっくり見た後、たれ目の色男・ギーリィさんは分かった。と言つて

装備が完璧な私の方は見ずに、アリさんに向かって、戦う準備をして20分後にここ集合。と言った。

その間にどんな戦い方ができるのか聞かせてくれと私のほうを向いていたギーリィさんに、アリさんは慌てて拒否をする。

「ディディアも準備があるので、あとで一緒にここに来ます！」
私の腕をつかみ、ぱかんとするギーリィさんを置いてギルドを出る。

アリさんは心配性だ。

宿屋に戻り、装備を整え一階の食堂をちらりと見たけど暗殺士のサイさんはまだ戻ってきていないようだ。

カウンターの一番隅には重剣士の人が一ぱつんと座っていた。

声をかけようか迷ったけど、今はそつとしておこうと思い
準備が整ったアリさんと一緒にギルドに向かった。

ギーリィさんはギルドの前で待っていたようで私たち2人に気づくと声をかけてくれた。

装備を整えた格好を見るからに、どうやらギーリィさんは魔剣士らしい。

貴族服のような皮で出来た上下だけど、腰に下げているのは剣。そして剣の柄の中央には大きな宝石がはまっている。

このような剣を持てるのはゲーム中では魔剣士だけだ。

ギーリーさんは武装してきた私たちを見ると面白そうに笑い。

「いいね。じゃあ、手ごろなの倒していきながら、最後はＣランク挑戦してみようか。」

私たちは顔を見合わせ一緒に頷く。

「お願いします。」

アリさんが答える。

あの、私いつまで喋るの禁止なのでしょいか。

アリさんをちらりと見ると。

分かっていないのか、私のほうを見るともう一度頷いた。

ああ、意思疎通が出来ていない。

「よし。じゃあ、最初は川にいるモンスターから始めて、最後は洞窟に住む岩イノシシを一人で倒せたらＣランクに昇進。ＯＫ？」

「分かりました。」

私も頷く。

岩イノシシとはその名の通り、岩みたいに硬く、イノシシのように猪突猛進なモンスターだ。

硬いし早いし当たれば大打撃をくらうこのモンスターは高レベルに分類される。

でも、一人で倒すにはガードが固く時間がかかるし、攻撃を受けたら一気に減るわで

あまり人気のないモンスターだ。

だけど、私は基本ソロプレイで一人で出来るクエストは一人で終わらせている。

この岩イノシシも反復クエだったので何回も挑戦していてソロでの戦い方ももちろん出来る。

対してアリさんはそこそこ大きなギルドに所属していて、クエストは大抵、相方であるサイさんと済ませているだろう。

とすると岩イノシシのソロでの戦いはあまりなれてないと思う。

だったら、私が先行して少しでも戦い方のヒントになればいいのでは。

要所要所で戦いながら3時間かけて岩イノシシの住む洞窟にたどり着いた私たちは洞窟より高い位置にある大きな岩の上に腰を下ろした。

「洞窟に入ればすぐ傍にいるだろう。で、どっちからいく？」

私は迷わず手を上げる。

心配性のアリさんが何か言ってくるかと思ったなら頷いて同意する。

「俺が先行だと万が一負傷した時、後攻のディディアを上手く助けない可能性があるから、先に行ってくれた方が良い。」

アリさんはやっぱり心配性でした。

「いや。なんか合ったら俺が2人とも助けるよ。」

私たちのやり取りにギーリーさんが苦笑する。

そつえば、ギーリーさんSランクだった。

Sランクがどれだけ強いのか分からないけど、かなりいい体してますもんね。

よし。強い2人が後ろに控えてるんだと思えたら、ちょっと楽にな

った。

深呼吸をすると、岩から飛び降りる。

「がんばれ。」

アリさんに手を振って答える。

よし。やるか。

ここに来るまでに出会ったモンスターは特に手順を気にせず、攻撃力のあるスキルを弓矢に入れて攻撃しまくるという突っ立ったままでも余裕で倒せるレベルだったけど。

岩イノシシはちょっとそうはいかない。

まず無音スキルを使い、自分の気配をモンスターに悟られないようにして

洞窟の前まで進む。

入り口まできたら、右のポケットから人差し指ほどの針を出し5本埋める。

この針に毒魔法をかけ、これを踏むと毒状態になるようにする。相手のレベルにもよるけど岩イノシシなら70%の確立で毒状態に出来る。

一撃必殺の超攻撃型ではないため、こういった地味に相手のHPを削る事は私にとって大事なのだ。

無音スキルを維持したまま洞窟内部を探ると、一匹近くにいたのでその岩イノシシに狙いを定め弓矢を一つ当てる。

すると、狙い通りにこちらに岩イノシシが突進してきたので洞窟の外に出て入り口横へとっさによける。

イノシシはそのまま私が設置した毒針を踏みつけ少し進んだところ

で一瞬よろける、が持ち直してこちらへ向きを変えた。
よし。毒状態になった。

イノシシが突進してくる前にすかさず呪文を唱え弓矢に鈍足スキルを入れて足に命中させる。

岩イノシシは足をしびれさせ上手く進めなくなったようだ。

岩イノシシの属性は土。土に勝つには木の属性が必要だ。

私がついている木属性のスキルは一つ。私の魔法量からして打てるのは1回。しかも奥深くに突き刺さないと効力を発揮しない。

もう少し弱らせて上を向き吼える瞬間があるから、そこを狙うのがベストだ。

ゲームでは流れるように出来た作業だけどリアルにすると上
手く出来るかどうか。

岩イノシシが思うように動いてくれるのを祈りつつ、次の動作へ移
る。

.....

「これは、凄いね。」

岩の上で見ていたギーリーはディディアの戦いぶりを見て思わず
呟く。

装備を見たときと雰囲気、あとここまで来るまでの道のりで動きに
無駄が無く攻撃力もあると思っていたが。

岩イノシシへの戦い方は計算されつくした、しなやかな流れるよう
な動きに見えた。

岩イノシシの戦い方を熟知しているから出来る事だろう。

何度も戦ってるのが見てて分かるほど、行動の先を読めている。

岩イノシシが上を向き吼えたところにディディアは魔法をかけた弓

矢を天高く打ち上げ、イノシシの口の真ん中へ突き刺した。
すると、その矢から次々と枝が出て一本の木へと成長していく。岩
イノシシの養分を吸い取った木は2mほどの大きさに成長した後
一瞬の内に枯れて姿を消した。
残ったのは干からびた岩イノシシのみ。

「こんな、魔法は見た事がない。」
魔剣士であるギーリーは魔法使いほどではないがそれでも弓使い
よりは魔法のことを知っていると思っていたが
自分もまだまだだと苦笑する。

と、よこで安堵のため息をつく音が聞こえた。
剣士のアリだ。

今の戦い方から察するに、ディディアは相当腕の立つ弓使いだ。
岩イノシシも危なげなく倒せたし、そんなに力を入れてみる必要は
ないと思う。

ここに来るまでのやり取りを見ても何故そこまで過保護になるのか
良く分からないギーリーは首をひねった。

.....

私は干からびた岩イノシシを見て勝ったのだと気づく。

ゲームではお金とアイテムを残して消えていくけど、ここではその
ままだから

本当は生きているんじゃないかと何度も振り返りながらアリさんと
ギーリーさんの元へと帰る。

「お疲れ様。」

とアリさんが笑顔で言ってくれたので、私も兜の中で笑い。

「アリさんもがんばってください。」
と声援を送った。

「女!？」

続けて聞こえた声に。約束の事は忘れて。その反応まってました！
と一瞬嬉しく思ったのは内緒。

じつと無言で見つめるアリさんに気づいたギーリィさんは苦笑して手を振る。

「何か理由が分かった。でも安心して良いよ。俺、こうムツチリしたのがタイプだから。」

ひょうたんみたいな形を空中に書き表現したギーリィさん。
なるほど。私はタイプじゃないってね。

悪かったね。スレンダータイプですよ。ふん。いや、寸胴って言うのか・・・。

その後戦ったアリさんは超攻撃型のタイプなので、両手剣を振り回し、多少攻撃は受けたものの

岩だろうがなんだろうが砕いてやるという怒涛の攻撃で見事勝利をもぎ取っていた。

私の戦い方、参考になりませんでしたね・・・。

5話

帰り道でギーリーさんに合格と言われ、Bランクに挑戦してもいいけると思うよ、と褒められた。

AとSランクになるには実力以上に信頼も必要なので、このランクは当分先らしい。目指すかどうかは分からないけど。

同じギルドの仲間に紹介したいから夕食を一緒にどうかと誘われたけど断っておいた。

暗殺士のサイの調査報告と残る3人の状態が気になるからだ。

Sランクのギーリーさんは忙しいらしく3日間しかこの町に滞在できないらしい。

情報が欲しいので、次は一緒にご飯を食べましょうと約束して別れた。

ギーリーさんと別れてしばらく無言だったけど、引っかかっていたことがあったので

確認のためアリさんに質問した。

「岩イノシシ、ゲームの中より強くなってますか？」

ゲーム中では鈍足スキルを撃った後、攻撃力UPのスキルをかけた弓矢を2・3回命中させれば

上を向きほえるのが通常だったけど

先ほど戦った岩イノシシは5回ほど弓矢を命中させなければいけなかった。

たった数回の違いだけど、この微妙なずれが気になる。

「あ。そういえばアリさんはソロプレイあまりしないですね。」

大きいギルドに入っている人は一定のレベルに達するとパーティークエストばかりこなすようになる。

1人でするクエストより大人数でクリアするクエストのほうが経験地も多く、武器もいいものが手に入るからだ。

岩イノシシは特にしなくてもいいような1人でするクエストなので、アリさんはあまりしていないだろうと思った。

「いや、岩イノシシなら俺も倒してたよ。」

え！意外だ。

「パーティー組むって言ったら大抵サイと組んでたけど。

あいつ気分屋だから一緒にクエストするのなんか時々で。俺、ソロプレイヤーとあんまり変わらないことしてたかも。」

あー・・納得。サイさんはクエスト以外のことにも興味心身っぽいからなあ。

「なるほど。だから私と個人チャットが出来てたんですね。」

私が言った個人チャットとは密かに会話出来る機能の事で、離れていても個人的に話が出来るチャットの事だ。

こちらに来る前プレイしていたゲーム中、私とアリさんはインした時に挨拶するし

暇なときには他愛ない話で数時間、個人チャットするような結構仲がいい関係だった。

まあ、アリさんとサイさんほどの仲じゃないけど。

私は基本ソロプレイだからチャットをしてても誰の迷惑になることもないけど

パーティー組んで別の人とチャットをしながらクエストをこなすなんて、アリさん器用な人だなあって思っていたのだ。

なるほど、アリさんも基本一人だったのか。

じゃあ、一緒にクエストしたかったな。今更遅いか。どうせゲームの世界にいるし。

「アリさんも以前の岩イノシシと何か違うと感じませんでした？」
アリさんは私の言葉に頷いた。

「ゲームだったら攻撃をもらう前にごり押しで終わってたんだけど、今回は攻撃回数を多くいれなきゃ倒れなかったな。」
やっぱり。

「私もです。数回多く攻撃しなければ倒せませんでした。」

これは、何を意味するのだろうか。
それとも私の気にしすぎなのだろうか。

宿屋の前に着くと、ああそうだ。とアリさんが何かを思い出したようだ。

私の腕を引き、宿屋の隣の店に来る。

「ここ普段着売ってるから買ったほうがいいよ。」

おお！

アリさんやサイさん、重剣士の人を着ていた綿の服はここで買ったのか。

「ガードンの服は買ったんだけど、女の人って何がいいのかわからないから3人のは買えなかったんだ。」

ごめん。というアリさんに勢いよく首を横に振る。

教えてもらっただけでもありがたい！

「よかったー！防具服しか持ってなくて、困ってたんです。」

さっそく、店に入り服をあさる。

女性3人の背丈は同じくらいなので私を基準として、胸のあたりを締め付けないような服を選べば大丈夫だろう。

膝丈までのゆったりしたワンピースにズボンはアラビアン服のように足首で締まっているタイプのもの。

生地の色はすべて茶色系だったけどかまわない。

上は濃い茶、下は薄い茶色で3種類購入した私はその足でまずキラさんの部屋に向かう。

「キラさん。」

トントンと扉を叩くけど返事がない。

どうやら留守らしい。下の食堂かな？

「サラディアさん。」

次は魔法使いのサラディアさんのへやのドアをノックする。

もしかして、みんなで食堂にいたりして。

そう思ったと同時に扉が開いた。

「ディディアちゃん・・・。」

どんよりとした顔のサラディアさんが顔を出した。

「サラディアさん。これ、普段着にどうぞ。」

私が服の前に差し出すと、それを見たサラディアさんは表情を柔らかくする。

「有難う。ディディアちゃん、・・・良かったら少し話さない？」

サラディアさんの部屋は私の借りた部屋と同じで、丸い机とベッドのみ。

ベッドに座ったサラディアさんの隣に私も座る。

「私ね。本当はこの世界に来たかったの。」
明るい調子で言ったサラディアさんの言葉にビックリする。

「こう言つとナルシストになっちゃうんだけど、この顔にこの体。
私の理想そのものでね。」

現実の私を思うといつも、この子になりたい。この世界に来て、
この子で人生過ごせたらなあつて」

サラディアさんは腰まであるサラサラの青色の長い髪に同色の大きな
きらきらした瞳を持つ可愛い綺麗な人だ。

女である私でもうっとりするような美貌なので、その気持ちもわかる。
る。

「でも、いざ来たら混乱して、戦闘になったら足がすくんで気持ち
悪くなって……。情けないなあ……。」

私は無言で首を振る。

「情けないの。だって……。ごめん。私、戦えない。怖くてみんなと
一緒に戦えない。」

サラディアさんは震える手を押さえるように硬く握り締める。

「でもね！置いて行かないでほしいの！何処かに行くのなら一緒に
連れてってほしいの。お願い見捨てないで……。！」

そんなまさか！

「置いて行くわけじゃないですよ！だって、この世界はゲームの世界だ
けど、ゲームじゃないんです。」

レベルを上げなきゃいけないわけでもないし。誰かを倒せなんてい
われてないし。」

じゃあ、何をすれば元の世界に帰れるのか分からないけど。

「私たちは仲間です。少なくとも私は絶対にサラディアさんを見捨てないと断言できます。」

他の人たちも同じ気持ちでいてくれると信じてるけど

こう言ったのは今、サラディアさんは目の前にいる私だけの気持ちを知らいたいだろうから。

サラディアさんは泣きながら私に有難うと言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6163z/>

気付けばゲームの世界

2011年12月20日21時16分発行